

全国学力学習状況調査の分析

国語の成果と課題について

【成果】

- A：「話すこと・聞くこと」において、日常の授業で自分の考えに理由を添えて伝え合ったり、相手の話を要約したりしながら聞く力が身に付いています。
- B：「読むこと」において、文章から必要な情報を正確に読み取ったり、筆者の主張を捉えたりする基礎的な読解力が着実に定着しています。

【課題】

- A：「児童が文章や資料を読んで、自分の体験や知識、与えられた資料やグラフから「何を書くか」の材料（根拠や理由）を見つけ出し、順序や組み立てを考えることに課題があります。
- 頭の中に考えはあっても、それを「段落の構成（結論→理由→具体的なエピソードや意見）」として組み立てる学習体験が不足していたり、「何を書けばいいかわからない」と手が止まってしまったりする場面が見受けられます。また、文脈が繋がらない箇条書きのような文章になってしまう児童も少なくありません。「書くこと」の指導は国語の授業だけに閉じず、全校・全教科での共通理解として取り組むことを大切にします。
- 「書く」活動をする際に、「自分の考え」「感じたこと」「疑問に思ったこと」を整理する習慣をもたせます。学年に応じた文章の「型（テンプレート）」を掲示することで、「どう書けばいいかわからない」と迷わないような手立てを講じます。また、実態に応じて、時間制限を設けたり、文字数や行数を指定したりして「書く」活動を行う「条件付きショートライティング」にも取り組ませることで、「書く」経験を豊かにします。
- B：「与えられたテキストや資料から必要な情報を正しく抽出し、整理・変換する国語的・論理的スキル」に課題があります。
- 語彙・文法（基礎的知識）の不足や、「情報の整理・比較（情報処理）」の苦手さが具体的な要因として挙げられます。基礎知識を高める方法として、「接続語・指示語」トレーニングの日常化を意識した取り組みを増やします。「情報比較・整理」の力を育むために、他教科（社会・理科等）での表・図の活用に取り組みます。複数の資料が出てきたら、文章でドラドラ書かせる前に「共通点・相違点表」や「事実と意見の分類表」などのマトリックスにまとめさせることで、情報処理能力を高められるようにします。また、日常的な指導として、授業の最後の「まとめ」や「ふりかえり」を書く際、単なる箇条書きではなく、「（見出し）＋（要点3つ）」などの構造化されたノートの取り方を工夫します。

算数の成果と課題について

【成果】

- A:「C 測定」の領域について、単なる「公式の暗記」や「計算力」のみでなく、実際の量感を体感的に捉える力や、公式や単位の仕組みの理解、複合的な条件から必要な要素を取り出す力、根拠をもって求め方を説明する力が身についています。
- B:「B 図形」の領域について、図形をただの「見た目の形（おにぎり型、四角い形など）」としてではなく、「辺の長さ」「角の大きさ」「平行や垂直」「対角線」といった構成要素に着目して分析的に見る力や、頭の中で図形を動かす力、図形の定義や性質を活用する力、性質を根拠にして説明する力が身についています。
- C:「D データの活用」の領域について、目的に適したグラフや代表値（平均値・中央値・最頻値）を選択できる力、複数のグラフを比較して、共通点や違いを見つけ出す力、グラフ等の見かけに惑わされず正しく判断する力、根拠（データ）を示して判断・主張を記述する力が身についています。
- D:「短答式形式」の問題において、正確な基礎処理能力、問いの「条件」を正確に読み取る力、出した答えを問題文に当てはめ直して、「明らかに数が大きすぎないか」「問題の条件と矛盾していないか」を客観的に確かめる力が身についています。

【課題】

- A:「C 変化と関係」の領域について、表から規則性を見つけて「言葉の式」や「 $y = \text{決まった数} \times x$ 」といった「式」に表したり、その式をもとに「グラフ」に表したりする異なる表現形式を相互に行き来（翻訳）することに課題があります。
- 感覚や暗記に頼らず、複雑な数量関係を機械的に整理できる「型」を統一することで「思考を可視化する」力を育てます。また、言葉で立式してから数値に置き換えるノート指導を行うことで、意味を捉えさせてから立式できるような力を育てます。学習の足跡を教室に掲示したり、表に「変化の矢印」を書き込ませる活動をしたりすることで、思考の視覚化（関係の整理）」と「根拠のある説明（言語化）」ができる活動を取り入れます。
- B:「選択式」の問題において、問題文の指示（「すべて」「記号で」）や選択肢の文脈を正しく読み取る情報処理能力や、問題文の指示（「すべて」「記号で」）や選択肢の文脈を正しく読み取る情報処理能力に課題があります。
- 「なぜその選択肢は違うのか（消去法）」を説明させる活動を行います。正解を選ぶだけでなく、間違っている選択肢の理由を言語化させることで、算数的な概念の理解を深めさせます。「根拠を言ってから答える」対話活動（ペアワーク）も取り入れることで、選択肢の中から「何が間違っているか（誤答の理由）」を正しく判別できる論理的視点（選択式的能力）や、自力で正解や根拠を文章化する力を育てます。

児童質問について

【全体を通して】

本校の児童は特に、「向社会性（思いやりや助け合いの気持ち）」「自己有用感（誰かの役に立っている実感）」「心理的安全性（ありのままの自分を出して安心して過ごせる感覚）」の項目において、非常に高い水準を示す結果となりました。「友達が困っていたら手助けしたい」「自分には良いところがある」「学校や学級に自分の居場所がある」と感じている児童が非常に多いということです。

このような良好な結果が得られた背景には、日頃の授業や縦割り活動、委員会活動等の中で、子どもたち同士が互いを認め合い、協力し合う姿が日常的に定着していることがあります。

さらに、国語・算数・英語の各教科に対する興味・関心や、授業中の主体的な学習活動の割合においても、高い水準を示す結果となりました。これは、「失敗しても大丈夫。」「友達や先生が受け止めてくれる。」という学校やクラスでの安心感（心の土台）があるからこそ、難易度のある学習や自分の考えを発表することに自信をもって意欲的に挑戦できているという、大変望ましい「学びの好循環」が生まれている表れです。

このような成果は、日頃の授業や縦割り活動などで互いを認め合い高め合う子どもたちの姿はもちろんのこと、ご家庭で温かく励まし、学校の取組に寄り添ってくださる保護者の皆様、そして温かく見守ってくださる地域の皆様のおかげであると感じております。

また、近年課題であった「ICT 機器の活用」についても、活用時間が多く取り入れられたことが分かりました。

【課題】

- ・「学習習慣」に関する調査から、学校や学級での「安心感」や「授業への意欲・主体的参加」が高い一方、「学習習慣（家庭学習の定着や計画的な学習など）」が全国や県平均と比較すると低数値であることが分かりました。学校内で完結する学びや人間関係が充実しているからこそ、「学校外（家庭・放課後）への接続」や「自己管理（セルフマネジメント）」の部分に課題が残っていると考えられます。学校内の学習活動に加えて、自主学習ノートのさらなる活用や、家庭学習においても ICT 機器（タブレット端末）を利用するなど、時間が有意義なものとなる活用方法を、今後も学校や家庭の協力のもと実践していきます。
- ・「英語に関する意識」が高い一方で、「英語の学習活動」は平均を大きく下回っており、意識が実際の行動に結びついていないことがわかりました。児童の心理的ハードル（気恥ずかしさや失敗への不安）や、活動設定の具体性不足が原因であることが考えられます。授業改善の方法として、授業での「アウトプットの心理的ハードル」を下げることに取り組んだり、「個別最適なアウトプット」の場を作ったりすることを意図的に増やしていきます。
- ・「読書等」に関する調査から、本校では「日常的に文章や本に親しむ習慣がない」児童が多くいることが分かりました。これは昨年度から続いている課題です。「本を読ませる」という義務感ではなく、「本との出会いの場を増やす」という視点で支援していくことを続けていきます。

小学校段階での読書習慣は、学力だけでなく、思考力や想像力、自己表現力、さらには向社会性にも影響するとも言われています。教室図書や図書室をさらに活用することで、「読書は特別な時間」ではなく、生活のルーティンにできるように努めてまいります。デジタル活用もすることで、読書という活動が児童にとってさらに身近に感じられるようにしていきます。